

# 愛知学泉大学の講義授業における学生の社会人基礎力養成の試み

—レクリエーション論、スポーツ社会学を対象として—

A Trial Study of Training the Fundamental Competencies for Working Persons in Lecture Classes of Aichi Gakusen University.

高橋 憲司 TAKAHASHI Kenji

## 概 要

本研究の目的は、2017 年度春semester開講の「レクリエーション論」、および「スポーツ社会学」において、社会人基礎力養成を目的とした授業展開により、社会人基礎力の3つの力（前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力）における学生の自己評価に与える影響を量的データから検討することである。また、教員評価に関わる「社会人基礎力を核にした教育活動および教育に関する研究活動に関するA判定のルーブリック」の各項目を意識して取り組んでいるため、著者自身の教員評価におけるエビデンスを示す報告資料となる。研究対象者は、「レクリエーション論」、および「スポーツ社会学」の受講学生とし、「レクリエーション論」では身体運動を伴うコミュニケーション活動を、「スポーツ社会学」ではプリント課題にてテキストによるコミュニケーション活動を授業内で展開した。社会人基礎力の評価は、「振り返りシート」を用いて「社会人基礎力を育む学泉ノート」に記載されている各能力要素のレベルを評価基準として設定し、学生に自己評価させた。社会人基礎力の評価は、各講義の5, 10, 15回授業時の合計3回実施した。結果、各講義とも、15回授業時には、「チームで働く力」が向上し、社会人基礎力全体が向上した。「レクリエーション論」では、授業内に取り組むべきレクリエーションで実施される活動は、大人数や全体で取り組む活動よりも、2～3名の少人数で取り組む活動の方が、社会人基礎力を向上させると考えられる。「スポーツ社会学」での今回の実践は、「チームで働く力」が養成されるとともに、「前に踏み出す力」が「考え抜く力」よりも相対的に必要になると示唆された。「スポーツ社会学」のような講義科目では、すべての能力要素を養成することは困難であると予測されることから、各科目の特性を踏まえ、大学が体系的なシステムを構築し、各科目同士を連携させ、総合的に学生の社会人基礎力を養成することが現実的な方法である。

## キーワード

教育の質で勝負、振り返りシート、学泉ノート、アクティビティ

## 目 次

- 1 はじめに
  - 2 本研究の目的
  - 3 調査方法
  - 4 結果
  - 5 考察
  - 6 おわりに
- 付録（別紙1，別紙2）

## 1 はじめに

学校法人安城学園は、愛知学泉大学と愛知学泉短期大学を高等教育機関として設置し、学士教育を展開している。大学の当面の課題は、建学の精神と社会人基礎力と pisa 型学力を核にして「教育の質で勝負できる学校を作る」ことであり(学校法人安城学園, 2017a)、安城学園報告討論会では、教職員が一丸となって、課題達成に向け取り組んでいる。そのような中で愛知学泉大学・短期大学は、平成 30 年度に社会人基礎力の卒業要件化を目指す方向で動いている。卒業要件化の要点は、2 つあり、1 つはプロジェクト型授業への移行であり、科目の目標を教員・学生が共同で実現しようと取り組むことで可能になると考えられている。もう 1 つは、学生の学修行動を変容させるための教育を展開することである。いずれの 2 点も主に教員が取り組むことであり、上記の要点 2 点を含む教育研究を行う必要がある。

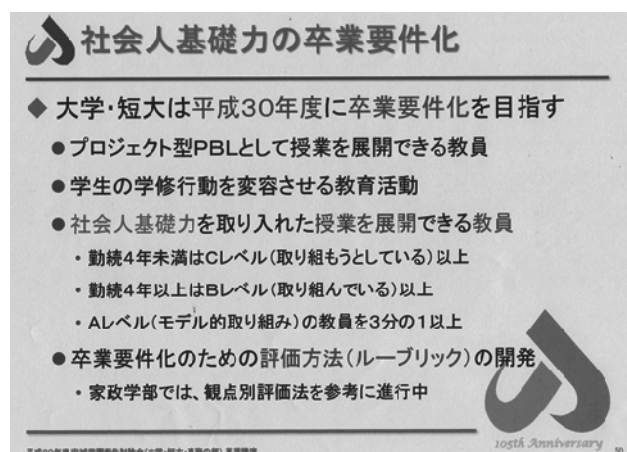


図1 社会人基礎力の卒業要件化 (寺部, 2017 より引用)

社会人基礎力の卒業要件化において、寺部 (2017) が図1に示している通り、社会人基礎力を取り入れた授業展開が可能な教員を必要としている。また、卒業要件化実現において教員陣に求めるレベルと人員の割合は、A レベル (模範的取り組みをしている) 教員が 1/3 以上としている。従って、著者を含めた教員は、A レベル教員となるべく教育活動を展開しなくてはならない。

A レベル教員となるには、「社会人基礎力を核にした教育活動および教育に関する研究活動に関する A 判定のルーブリック」に示されている A11~B25 までのすべての項目を満たす必要がある(学校法人安城学園, 2017b)。項目の具体的な内容は、以下の文言となっている。①社会人基礎力の必要性について、⑦「初回授業の週」、④「15 週に当たり」、および⑦

「授業最後の週」に学生に対して説明していること。②シラバスに記載した能力要素の必要性を⑦「初回授業の週」、④「15 週に当たり」、および⑦「授業最後の週」に学生に対して説明していること。③シラバスに記載した能力要素を授業の中で学生に発揮させるために、⑤「学泉ノート」、④「セルフチェック」を活用している。③シラバスに記載した能力要素を授業の中で学生に発揮させるために、⑦「授業の準備を」⑤「意図的な働きかけを学生に対して」行っている。④授業準備以外に、②「社会人基礎力に関する研究活動を」⑦社会人基礎力の能力要素の中から特定の要素を取り上げた取り組みを」行っている。①、②、③、および④については、「明確なエビデンスを示し、具体的に記載されている」ことが求められ。また④については、「実際に一定の時間を割いている」ことが追加で求められている。

以上のように、レベル A 教員となるためには、上記項目すべてについて、エビデンスを示して具体的に示す必要があり、その記録として、社会人基礎力養成を目的とした授業を実践した結果について研究ノートとして報告することが一つの方法となる。

著者自身は、本大学に赴任して 3 年目の教員である。図1にも「勤続 4 年未満は C レベル (取り組もうとしている) 以上」と記載がある通り、学内の教育環境や学生の特性に慣れ、かつ教育・研究活動を行いながら、学泉大学独自の教員評価基準を十分に熟知した上で取り組むには、最低でも 1,2 年の期間が必要であると感じている。昨年度の教員評価では著者は「C」評価であったが、この評価は、ルールを知らずに、ゲームに取り組んでいるようなもので、ゲームでハイスコアを得ることはできない状況と同じである。また、昨年度については、秋semester終了間際に、教員評価基準が明確にされた状況からは、タイムマシーンに乗って、時間を遡ることができないように、評価基準に則した対応が取れなかった。個人や集団は、目標があるからこそ、注意・集中を傾注することができる。人間は無限の可能性を持っているが、人間の持つ寿命という時間やエネルギーは有限であるため、効率よく無限の可能性を探求・開発するには、早期に目標を明確にする必要があることを強く感じた。

今年度は、教員評価基準を理解した上で、「考え抜く力」を発揮し、試行錯誤して考え出したアイデアをすぐに実践に移した。そして、今回の実践結果を公表し、方法論 (社会人基礎力の評価基準の方法等)

を共有することで、問題点や改善点が浮き彫りになり、著者自身のスキル・キャリアアップにつながる。とともに、A レベルの基準を満たす教員が増え、社会人基礎力の卒業要件化が早期に達成されるのではないかと期待するところである。

## 2 本研究の目的

本研究の目的は、2017 年度春semester開講の「レクリエーション論」、および「スポーツ社会学」において、社会人基礎力養成を目的とした授業展開により、社会人基礎力の3つの力（前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力）における学生の自己評価に与える影響を量的データから検討するものである。

学生の自己評価については、『振り返りシート』を独自に編集したものを使用し、『社会人基礎力を育む学泉ノート（学泉ノート）』に記載されている各能力要素のレベルを評価基準として採用した。以上のように、本研究では「社会人基礎力を核にした教育活動および教育に関する研究活動に関するA判定のルーブリック」の各項目を意識して取り組んでいるため、愛知学泉大学の教員評価におけるエビデンスを示す報告資料としても活用する。

## 3 調査方法

### 3.1 対象学生

愛知学泉大学現代マネジメント学部の2017 年度春semesterに開講されている「レクリエーション論（開講年次2年）」を受講した学生66名、および「スポーツ社会学（開講年次3年）」を受講した学生22名とした。

### 3.2 教育内容

「レクリエーション論」では、2016 年度と同様、レクリエーションに関する専門用語を修得させるための教育、レクリエーションインストラクターの資格取得カリキュラムに沿った教育に加え、学生の気分転換も兼ねて、レクリエーション活動に用いられるアクティビティを1回の授業で10～15分程度実施した。この授業内で実施するアクティビティは、二人組や集団で活動するものが多く、活動には主体性を必要とし、チームで働く力が求められることから、学生の社会人基礎力養成には、効果的と考え授業時間内に配置した。

「スポーツ社会学」では、学生個人が主体のアクティブラーニングスタイルを展開した2016 年度の内容を一部改変した。昨年度までは、スポーツ社会学の設題において、学生の考えや解決策を記載する内容であったが、2017 年度は、学生が記載した内容に対して、ペアもしくは3名で、各学生の意見、考え、アイデア等に対して、他の学生が批判的な視点を含めてコメントを記載する項目を追加した。一例として、「スポーツ現場における連体責任処分の是非について、立場を明確した上でその理由を記載せよ」という設問に対して、学生が立場（是・非）を決め、その理由を明記した内容を、他の学生が読み、反対の立場から批判的な視点でコメントするという内容である。学生一人当たり、設題の書かれた課題用紙一枚（A4用紙）に取りくむため、コメントを記載する時は、学生同士で課題用紙を交換する必要がある。よって、課題への取り組み方を計画的に進めることが求められ、設題への優先順位を学生同士で話し合い、仲間と仕事をするように取り組むため、社会人基礎力の発揮が必要となる。

「レクリエーション論」では、アクティビティを実践することで、学生同士で身体動作を含むコミュニケーション活動を経験できる。「スポーツ社会学」では、課題用紙にてテキストを用いて、学生同士の議論を交えたコミュニケーション活動となる。受講学生は、科目によって大きく異なることから、科目間比較は意味をなさないが、教育内容の違いによって学生に求める社会人基礎力はそれぞれ異なると考えられる。よって、社会人基礎力養成を目的とした今回の実践から、何の能力が、どのような取り組みによって伸ばすことができるかについて、示唆を得ることができると考えている。

### 3.3 社会人基礎力の評価方法

「レクリエーション論」、および「スポーツ社会学」とも、第5,10,15回の授業時に、社会人基礎力推進委員会が作成した『振り返りシート』を著者が独自で改編したもの（別紙1参照）を用いて、受講学生に記名式で、①社会人基礎力の自己評価、②3つの力（前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力）の具体的発揮状況、③その他（今回の反省・要望・授業の進行方法など）、④学泉ノート持参の有・無、⑤出欠状況について回答させた。

①社会人基礎力の自己評価は、『社会人基礎力を育む学泉ノート（学泉ノート）』に記載されている12

の能力要素の1～5のレベル(別紙2を参照)に、この授業では養成されない＝「なし(0)」を加えた6段階で評価させた。

②3つの力の具体的発揮状況は、記載例(前に踏み出す力・・・今回はじめて□□団体の〇〇さんに自分から話しかけて、次の活動について指示を仰いだ等)を参考に、項目毎にすべて記述式で回答させた。

③その他(反省・要望・進行方法等について)は、白紙や「特に無し」といった回答をさせないようにし、必ず記載をするように指示した。また、授業の進行方法については、私自身も社会人基礎力養成を目的とした教育方法を試行錯誤しているため、できる限り記載するように学生に要望した。

④学泉ノートの有・無は、振り返りシート記載時に、毎回の授業に持参するように指示していた「学泉ノート」の持参の有・無を回答させた。①の回答の際、学泉ノートが無ければ12の能力要素の自己評価基準を参照できないため、持参していない学生に対しては「前に踏み出す力」を発揮して、回答の終わった学生に声をかけて学泉ノートを借りるように促した。

⑤出欠状況は、学生自身に出席、遅刻・早退、欠席、および公欠の各回数を記載させるようにした。記載に当たっては、『振り返りシート』記載当日の出席状況を除いて記載させた。

尚、本調査での分析対象は、①、④、⑤の量的データとし、②、③の質的データの分析結果については、次の号以降にて報告予定である。

### 3.4 有効回答と統計解析

有効回答は、各教科の履修学生の内、5回、10回、15回の『振り返りシート』をすべて記載した学生のみの回答とした。

統計解析は、『振り返りシート』①の社会人基礎力の自己評価において、12の能力要素の上位尺度となる3つの力「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」と「3つの力の合計」を従属変数として、評価日(第5、10、15回授業時)を独立変数として、一要因のみ対応のある二要因分散分析にて検討した。下位検定にTukey's HSD法を用いた。有意水準はいずれも5%未満とした。

有意差のみられた2群間の差の程度は、効果量ES(d)にて検討した。効果量ES(d)の程度の解釈は、Cohen(1988)を参考に、0.2～0.5未満を「小さい」、0.5～0.8未満を「中程度」、0.8以上を「大きい」と

判断した。

## 4 結果

### 4.1 有効回答率

「レクリエーション論」における有効回答者数は、履修者66名に対して37名であり、有効回答率は56%であった。無効回答者の内、10名は欠席日数が6回以上のため、定期試験受験資格のない学生であった。有効回答者の第5、10、15回目授業時の学泉ノート持参率は、57%、68%、62%であった。また、有効回答者の全15回の欠席日数は、平均 $2.41 \pm 1.52$ 日であった。

「スポーツ社会学」における有効回答者数は、履修者22名に対して10名であり、有効回答率は45%であった。無効回答者の内、9名は定期試験受験資格のない学生であった。有効回答者の第5、10、15回目授業時の学泉ノート持参率は、50%、80%、80%であった。また、有効回答者の全15回の欠席日数は、平均 $3.40 \pm 0.80$ 日であった。

### 4.2 社会人基礎力

図2に、「レクリエーション論」、および「スポーツ社会学」の各評価日(第5、10、15回授業時)における社会人基礎力の得点の平均値および標準偏差を示す。

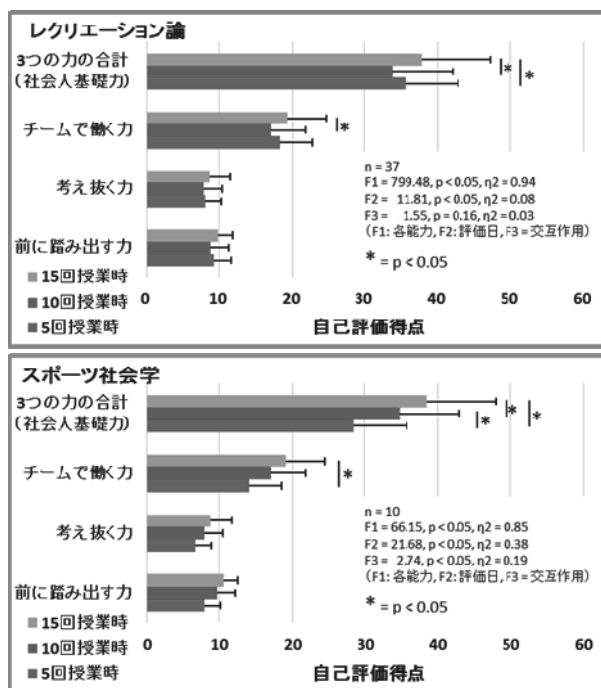


図2 社会人基礎力における自己評価得点の推移。

上図：レクリエーション論，下図：スポーツ社会学。

「レクリエーション論」における各調査時の社会人基礎力の平均得点は、分散分析の結果、交互作用に有意差が認められず（ $n = 37$ ,  $F$  値 = 1.55,  $p = 0.16$ ,  $\eta^2 = 0.03$ ）、評価日要因の主効果に有意差が認められた（ $n = 37$ ,  $F$  値 = 11.81,  $p < 0.05$ ,  $\eta^2 = 0.08$ ）。下位検定（Tukey's HSD）の結果、「チームで働く力」は 10 回よりも 15 回授業時の方が得点は高く【効果量  $ES(d) = 1.02$ 】、「3 つの力の合計」は、5 回、および 10 回授業時よりも 15 回授業時の方が得点は高かった【効果量  $ES(d) = 0.35, 0.68$ 】。

「スポーツ社会学」における各調査時の社会人基礎力の平均得点は、分散分析の結果、交互作用に有意差が認められた（ $n = 10$ ,  $F$  値 = 2.74,  $p < 0.05$ ,  $\eta^2 = 0.19$ ）。下位検定（Tukey's HSD）の結果、「チームで働く力」では 10 回よりも 15 回授業時の方が得点は高く【効果量  $ES(d) = 1.02$ 】、「3 つの力の合計」は、5 回授業時よりも 10 回、および 15 回授業時の方が得点は高く【効果量  $ES(d) = 0.8, 1.2$ 】、10 回授業時よりも 15 回授業時の方が得点は高かった【効果量  $ES(d) = 0.43$ 】。

## 5 考察

### 5.1 有効回答率

有効回答率は、「レクリエーション論」56%、「スポーツ社会学」45%と約 5 割であったため、おおよそ全体の傾向を反映していると判断できる。無効解答者数では、「レクリエーション論」は 10 名で全体の 15%に対して、「スポーツ社会学」は 9 名で全体の 41%であることから、スポーツ社会学の方が脱落率が高い。この脱落率の違いは、時間割の関係で「スポーツ社会学」が 1 限に配置されていることから、朝早く大学に到着しなくてはならないが、夜間アルバイト等で、就寝時間が遅くなり、寝坊してしまうことで、出席できないといった影響が考えられる。

有効回答者の平均欠席日数は、レクリエーション論：2.41±1.52、スポーツ社会学：3.40±0.80 であり、約 3 日が欠席日数の平均値となる。筆者の希望は平均 2 日以下であってほしいため、多いと感じている。ただし、基準や参考となる全体の数値がないため、今回の欠席数についての客観的判断はできない。欠席数だけではなく、遅刻数や公欠数も含め、全教科の出欠数を集計して、曜日や開講時間等の時間割配置を影響因子として考慮に入れ、出欠状況全体を把握し、検討する必要があると考えている。こ

れらのデータは教育方針を決定づけるための情報として活用できる可能性が高いと思われる。

学泉ノートの持参率は、5 回授業時は 5 割程度であるが、10、15 回授業時には 6~8 割まで向上するが、全員が持参するまでには至っていない。学泉ノートは、毎授業時に常に持ち歩くように学生に声をかけているが、この状況からでは、他に対策を立てる必要がある。学泉ノートを紛失しても、コピーやダウンロードしたものでも可としているが、授業内での学泉ノート使用状況から、冊子で製本されたものが多く、プリンタで印刷したものは、ほとんど見られなかった。コピーや印刷は手間がかかるため、敬遠される傾向にあると思われる。今後は、学泉ノートをスマートフォンの写真機能で撮影保存し、それを参考にしても可として、学生の実情に合わせて、対応していきたい。何らかのポータルメディアに学泉ノートのデータを保存していれば、常に持ち歩いていると言える。

### 5.2 社会人基礎力

「レクリエーション論」、および「スポーツ社会学」とも、15 回の授業を通じて、社会人基礎力の合計得点が向上し、3 つの能力では、チームで働く力が特に向上する結果であった。今回のように、学生同士で取り組まなければならない課題を設定することで、文字通り「チームで働く力」が養成されることが示唆された。

### 5.3 「レクリエーション論」における社会人基礎力

「レクリエーション論」の社会人基礎力の各能力得点に着目すると、どの能力も 10 回授業時の得点が低いことが観察できる。この原因として、アクティビティの内容の違いが考えられる。1~4 回の前半授業では、2 人組、および 3 人組での活動のため、お互いコミュニケーションを密にして取り組む内容であったのに対し、6~9 回の中盤授業では、大人数グループや全体での活動であった。これらの活動は、より大きな成果や充実した体験を得るには、20~30 分程の時間と集団での個人の役割等を十分に理解した上で取り組む必要があるため、15 分程度の時間では十分な活動にならなかったと思われる。

学生に体験させた大人数グループでの活動は、個人の役割が少なく、他の学生に任せたり、一部の学生の活動量が多いといった、グループ活動としての負の側面が見られた。全体で取り組む活動では、約

45名の学生に対して、著者1人で実施させたため、監督者である著者の見ていない隙について、ルールを無視したり、取り組んでいる素振りだけの学生がいたり、目的とした活動ができていない学生が相当数いたと判断している。特に、全員終了まで10分以上必要とする活動において、学生の積極的な様子がほとんど観察されない状況の中で、開始3分後には、約半数の学生が活動を終了していたことが一つの根拠となっている。集団および全体でのレクリエーション活動の実施は、主となる教育の時間配分を最大限考慮した上で、実施に際しては細心の注意を払う必要がある。

上記のような集団および全体で取り組む活動を展開する際は、SA（スチューデントアシスタント）の学生を数名（学生15名に対して1名）雇用し、教員とともにファシリテーター役を担わせることで、学修行動を変容させる糸口を受講学生につかませることができるのではないかと考えている。しかしながら、SA採用は実技科目が多く、講義科目はほとんどなく、採用されても1名である。そのため、SA採用は現実的な解決策ではないが、これまでの思い込みを覆すことも、教育改革に取り組む上での一つの行動目標となるため、合理的なSA採用システムを模索していきたい。

一方、「レクリエーション論」の11～14回の後半授業では、「ヒット&ブローゲーム」のように個人もしくはペアを対象とした単純なアクティビティを取り入れたことから、学生同士の交流の質が高まり、「チームで働く力」の自己評価が上昇したと考えられる。「チームで働く力」のチームという言葉は、5名程度の人数が集まったものと個人的には連想しがちであるが、目的を共有し、同じ意志の下、お互いが同じフィールドで活動すれば2名でもチームとして成り立つ。

「レクリエーション論」の講義科目において、社会人基礎力の養成を目的として身体運動を伴う教育活動を取り入れる場合は、大人数のグループや全体でのレクリエーション活動を取り入れるよりは、少人数でチームを結成して取り組むアクティビティが効果的であると結論づけたい。

#### 5.4 「スポーツ社会学」における社会人基礎力

「スポーツ社会学」では、「チームで働く力」が強調される取り組みとして狙いを定めるとともに、チームを結成するために「前に踏み出す力」が必要に

なると予測していた。結果、評価日の違いによる影響は「前に踏み出す力」「考え抜く力」では差はみられなかったが、「チームで働く力」に差がみられた。一方で、各能力得点の平均値だけに着目すると授業日数を重ねる毎に上昇する傾向を確認できる。以上の結果から、スポーツ社会学での授業実践は、「チームで働く力」を中心に社会人基礎力を総合的に向上させることができると示唆される。

能力要素数が同数（3項目）である「考え抜く力」と「前に踏み出す力」の平均値を比較すると「前に踏み出す力」が大きいことから、「考え抜く力」よりも「前に踏み出す力」が今回の実践では必要とされると判断できる。

「スポーツ社会学」での実践は、2～3名で課題に取り組むものであったが、「レクリエーション論」の中盤授業で実施した身体活動のように、5名以上のグループで取り組む課題を設定し、少人数で取り組む課題と比較することで異なった結果が得られるかもしれない。これは、来年度に向けた次なる課題としたい。

「スポーツ社会学」のような講義科目において、すべての能力要素を伸ばす取り組みは大変困難であるとして予測されるため、すべての能力を向上させる取り組みを計画することは、授業準備に多大な労力と失敗のリスクを抱えることになるとと思われる。講義科目は、実習や演習科目にくらべ、開講数が多いことから、各講義の特性を踏まえ、講義間で連携を取りながら、いくつかの能力要素に絞って、取り組むことが、主となる教育内容を損なわずに、教育的な相乗効果が得られると考えられる。これには、大学として体系的なシステムを構築する必要がある。教科間での連携した社会人基礎力養成の取り組みのためにも、他の教科でも本研究と同じ評価基準を用いて検討することで、どの能力要素が求められるかを明らかにする必要があるのではないかと考える。

#### 6 おわりに

本研究では、学生の社会人基礎力養成を目的とした教育の実践について、既存の評価基準を用いて検討を行った。本研究のデザインは、著者が大学教員の立場で専門分野の研究手法からアレンジしたものである。著者自身は、大学教員としてのアイデンティティーは、他の教育機関に所属する教員にはない専門性の研究であると信じて疑わない。専門分野における研究手法・お作法を熟知していれば、研究分

野が異なったとしても、また、今まで取り組んだことのない研究分野であったとしても、研究への取り組み方は十分応用可能である。得てして怖いのは、現場での教育実践にのみ取り組んでいる教員が、独りよがりな解釈で、研究デザインから外れた手法にて作為的な結果を導き出し、それを結論として受け止め、教育現場に持ち込んでしまうことである。

著者自身は様々な研究分野に興味がある。よって時間が許すのであれば、分野を問わず様々な研究を実施したい。しかしながら、専門性がある大学の大学教員であるため、プロの大学教員とは、最も重要な研究に時間を割き、専門分野の研究を精力的に取り組みつつ、今回のような教育学に関する分野においても成果を出せる人間であると考えている。

### 引用文献

- 学校法人安城学園（2017a）．「学園だより平成 29 年度 第 2 号：第 19 回安城学園報告討論会」学校法人安城学園法人本部理事長室．
- 寺部 暁（2017）．「教育の質で勝負できる学校を作る・見学精神と社会人基礎力と pisa 型学力を核にして」第 19 回安城学園報告討論会 基調講演スライド．  
<https://www.anjogakuen.jp/wp/wp-content/uploads/keynote19th-univ-slide.pdf>．
- 学校法人安城学園（2017b）．「第 19 回安城学園報告討論会 基調講演 資料集」  
<https://www.anjogakuen.jp/wp/wp-content/uploads/keynote19th-univ-handout.pdf>．
- Cohen, J (1988). 「Statistical Power Analysis for the Behavioral Sciences (Second Edition)」New York, Academic press.

（原稿受理年月日 2017 年 10 月 11 日）

## 付録

## 別紙 1

## 振り返りシート

記入日：20 年 月 日

授業：授業名： 授業回数 回～ 回、 or 実習：活動日時：20 年 月 日 時～ 時

1. 学籍番号： 2. 名 前：

3. 社会人基礎力の各能力要素は、今回の活動でどの程度発揮できましたか？ 右の欄に○を書こう！

※①②③④⑤の評価は学泉ノートを参考に記載すること なし = この授業では養成されない

3つの能力	12の能力要素	①	②	③	④	⑤	なし
前に踏み出す力	主体性（物事に進んで取り組む力）						
	働きかけ力（他人に働きかけ巻き込む力）						
	実行力（目的を設定し確実に行動する力）						
考え抜く力	課題発見力（現状を分析し目的や課題を明らかにする力）						
	計画力（課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力）						
	創造力（新しい価値を生み出す力）						
チームで働く力	発信力（自分の意見をわかりやすく伝える力）						
	傾聴力（相手の意見を丁寧に聴く力）						
	柔軟性（意見の違いや立場の違いを理解する力）						
	状況把握力（自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力）						
	規律性（社会のルールや人との約束を守る力）						
	ストレスコントロール力（ストレスの発生源に対応する力）						

4. どんな場面で3の力が発揮できたと思いますか。具体的に書こう。※必ず記載すること

（例：前に踏み出す力…今回はじめて□□団体の〇〇さんに自分から話しかけて、次の活動について

指示を仰いだ。また、何をしたらいいか戸惑っていた仲間に対して、「△△をやろうよ」と誘い、一緒に活動することができた。）

前に踏み出す力	
考え抜く力	
チームで働く力	

5. その他（今回の反省・要望・授業の進行方法など何でもどうぞ） ※必ず記載すること

6. 確認事項

●学泉ノート持参の有・無 ⇒ あり ・ なし （○をつける）

●出欠状況：調査期間：授業の第 回 ～ 第 回

状況：出席 回、遅刻・早退 回、欠席 回、公欠 回

## 別紙 2

### 社会人基礎力 12 の能力要素の各レベル

#### 主体性のレベル

レベル 5：目的（目標）を自分のものとして受け止めている。そして、そのために必要なことを自発的に探し出し、積極的に取り組んでいる。一歩でも前に進めようとする意欲に満ち溢れている。

レベル 4：目的（目標）を自分のものとして受け止めている。そして、そのために必要なことを自発的に探し出し、積極的に取り組んでいる。一歩でも前に進めようとする意欲に溢れている。

レベル 3：目的（目標）を達成するために必要なことを自発的に探し出し、取り組んでいる。一歩でも前に進めようという意欲がある。

レベル 2：目的（目標）を達成するために必要な指示されたこと又はやらないといけないことについては取り組んでいる。

レベル 1：目的（目標）が理解できていなくても、指示されたこと又はやらないといけないことについては取り組んでいる。

#### 働きかけ力のレベル

レベル 5：目的（目標）を達成するために、特に、活動が順調にいったいないときでも「一緒にやろう」「協力してほしい」と働きかけを行っている。

レベル 4：目的（目標）達成のために、協力・協働の輪がより深まるように「一緒にやろう」「協力してほしい」と働きかけを行っている。

レベル 3：目的（目標）達成のために、協力・協働の輪が広がるように「一緒にやろう」「協力してほしい」と、同じ立場の人に働きかけを行っている。

レベル 2：自分一人では、十分な成果が出せないような場合に、目的（目標）を達成するためには、他の人の協力を得てやろうという姿勢がある。

レベル 1：何事に対しても、人に協力してもらおうという姿勢がなく、自分一人でやろうとする。

#### 実行力のレベル

レベル 5：目的（目標）を自分で設定し、それを達成しようという強い意志を持っている。そして、PDCA のどの局面においても、決めたこと・決められたことを期限までに確実に成し遂げている。

レベル 4：目的（目標）を自分で設定し、それを達成しようという強い意志を持っている。そして、決めたこと・決められたことを期限までに確実に成し遂げている。

レベル 3：目的（目標）を達成しようという意志を持っている。そして、決めたこと・決められたことを期限までに確実に成し遂げようと行動し続けている。

レベル 2：目的（目標）を達成しようという意志を持っている。そして、決めたこと・決められたことにもとづいては、成し遂げようと行動している。

レベル 1：目的（目標）を達成しようという意志が希薄である。従って、行動するまで時間がかかる。

#### 課題発見力のレベル

レベル 5：現状の把握・実態の的確な分析・問題点の洗い出しを基に、「これなら取り組んでみよう」と思える課題を提案している。

レベル 4：現状の把握・実態の的確な分析・問題点の洗い出しを基に、何が課題であるか明らかにしている。

レベル 3：現状の把握・実態の分析を基に、問題点の洗い出しができています。

レベル 2：現状の把握・実態の分析を基に、問題点を把握している。

レベル 1：現状把握・分析ができない。従って問題点を把握することが難しく感じる。

#### 計画力のレベル

レベル 5：課題解決のための手順・方法・スケジュールを PDCA サイクルにまで落とし込んだ形で実施計画（案）を提案している。実現可能な実施計画（案）になっている。

レベル 4：課題解決のための手順・方法・スケジュールを実施計画（案）という形で提案している。実現可能な実施計画（案）になっている。

レベル3:課題解決のための手順・方法だけでなく、スケジュールも提案している。

レベル2:課題解決のための手順・方法を提案している。

レベル1:課題解決の方法が分からない。そのため、手順・方法を考えるのに時間がかかる。

### 創造力のレベル

レベル5:課題解決を目指して、従来の考え方や固定概念に捉われずに発想・コミュニケーション・行動している。その結果、新しい価値を生み出している。

レベル4:課題解決を目指して、従来の考え方や固定概念に捉われずに発想・コミュニケーション・行動している。その結果、課題解決に繋がっている。

レベル3:課題解決を目指して、従来の考え方や固定概念に捉われずに発想・コミュニケーション・行動している。

レベル2:課題解決を目指している。しかし、従来の考え方や固定概念の中で発想・コミュニケーション・行動している。

レベル1:従来の考え方や固定概念の中で発想・コミュニケーション・行動している。しかし、課題解決との関連性が薄い、またはずれている。

### 発信力のレベル

レベル5:自分の主張を持っている。相手に分かるように整理した上で、自分の主張を相手に的確に伝えているだけでなく、相手にも理解してもらえている。

レベル4:自分の主張を持っている。相手に分かるように整理した上で、自分の主張を相手に的確に伝えている。

レベル3:自分の主張を持っている。そして、自分の中でわかり易く整理・整頓されている。また、自分の主張を相手に伝えている。

レベル2:自分の主張を持っている。しかし、自分の中で整理・整頓されていない。

レベル1:自分の主張を持っていない。従って、他者の意見を聞いているばかりである。

### 傾聴力のレベル

レベル5:「自分の話を聞いてもらっている」と相手

の人が感じている。そして、相手の言いたいことを整理したり確認しながら聴いている。さらに、相手の考えや意見を積極的に引き出すことができ、「自分が話したかったことが十分理解してもらえた」と話の後で評価されている。

レベル4:「自分の話を聞いてもらっている」と相手の人が感じている。さらに、分からないことがあった場合、相手に質問するなど、相手の言いたいことを整理したり・確認しながら聴いている。

レベル3:相手の話に丁寧に耳を傾けている。さらに、相手の話に頷いたり・相槌を打ったりして、相手の人が「自分の話を聞いてもらっている」と感じている。

レベル2:相手の話に丁寧に耳を傾けている。

レベル1:相手の話をきいているつもりであるが、相手から注意されることがある。

### 柔軟性のレベル

レベル5:お互いの考え方の違いを冷静に整理・整頓して、代替案を提案するなど物事を一歩前に進める方向で対応している。

レベル4:お互いの考え方の違いを冷静に整理・整頓して、どうしたら同じ方向で活動できるか調整しようとしている。

レベル3:立場や人によって考え方が違うということを理解した上で、さらに、お互いの相違点を冷静に整理している。

レベル2:立場や人によって考え方が違うということを理解している。

レベル1:自分の考え方が異なる人がいると、その人を避けてしまう。

### 状況把握力のレベル

レベル5:自分の立場・役割・使命を的確に理解している。そして、周囲の人々の人間関係、物事の進行情況を踏まえて、物事を一歩前に進める方向で適切に行動している。

レベル4:自分の立場・役割・使命を的確に理解している。そして、周囲の人々の人間関係、物事の進行情況を踏まえて、適切に行動している。

レベル3:自分の立場・役割・使命を的確に理解している。さらに、周囲の人々がどのよう

な人間関係にあるか、物事がどのように進行しているか把握している。

レベル 2：自分の立場・役割・使命を理解している。そして、チームや周りの状況を考えることができる。

レベル 1：自分の立場・役割・使命を理解していない。また、チームや周りの状況を考えることができない。そのため孤立してしまう。

### 規律性のレベル

レベル 5：一般社会のルール・慣習だけでなく、自分たちで作ったルールも守って行動している。さらに、ルールを守らない人に対してはルールを守ろうと注意できる。

レベル 4：一般社会のルール・慣習を守って行動している。さらに、目的（目標）を達成するために、自分たちで作った自分たちのルールを守って行動している。

レベル 3：一般社会のルール・慣習を理解し、それを踏まえて行動している。さらに、目的（目標）を達成するために、自分たちのルールを自分たちで作ることができる。

レベル 2：一般社会のルール・慣習については理解している。従って、一般社会のルール・慣習を守ろうとしている。

レベル 1：一般社会のルール・慣習については理解が薄い、従って、一般社会のルール・慣習を守ることができない時が多い。

### ストレスコントロール力のレベル

レベル 5：ストレスを自己の成長のチャンスと前向きに受け止めることができる。そして、ストレスそのものを自己の成長のためのチャンスにしている。

レベル 4：ストレスができるだけ発生しないようにセルフコントロールしている。そして、ストレスが発生しても、自分なりの方法でストレスを解消しながら取り組むことができる。さらに、ストレスを自己の成長のチャンスと前向きに受け止めることができる。

レベル 3：ストレスが発生しても、自分なりの方法でストレスを解消しながら取り組むことができる。

レベル 2：ストレスは誰にでも発生するものだということを理解している。そして、ストレスを感じることに對しても取り組むことができる。

レベル 1：ストレスを感じることは最初から組み込まなかったり、途中で回避する。